

薬物依存者の支援施設 記者が2泊

現場を  
究める

# 麻薬断つ孤独な日々

## 襲う欲求、絶えぬ脱走

車のバックミラーに筑波山が映る。3月下旬の正午前。筑西市を越え栃木県に入ってすべ、田園地帯にはつんと立つ赤い屋根と白い壁の平屋を

コーラのペットボトルを片手に、絶えずたばこをくゆらせる。大きなガラスの灰皿は吸い殻でいっぱいだ。

目指した。中で生活するのは覚せい剤や大麻、シンナーなどによる薬物依存から抜けきれない女性たちだ。

その輪の中に入って話を聞くと、34歳のカナ(仮名)が片手を差し出して見せた。

12畳ほどの居間に一つ置かれた石油ストーブを、5人が囲んでいた。みな低カロリー

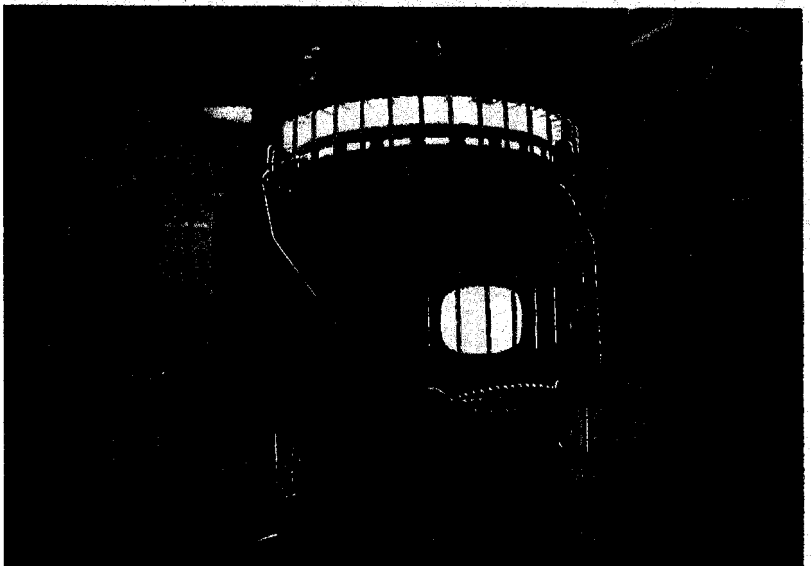
「ほら、もう血管がないでしょ」。覚せい剤を注射した跡は残っていないが、ひじはもろろん、手のひらも甲もつるつるとして、目をこ

らしても静脈の筋は見えなかった。「打ちすぎて皮膚が硬くなって、刺す血管もなくなっちゃったんだよね」

### ■生活リズム矯正

生活は規則正しい。平日は朝7時過ぎに起床。午前9時と午後7時からの2回、1時間半のミーティングがあり、午後は太鼓の練習や温泉へ行く課外活動。その合間にトイレや風呂場掃除をこなし、15分ほどの買い物時間が入る。生活リズムの矯正が回復の一步になる。

散歩にも行けるが、万引きや電話、逃走などへの衝動を抑えるため、外出は複数行動が原則。携帯電話はもちろん、外部との手紙のやりとりも禁止されている。



一番広い居間に置かれた石油ストーブの周りでくつろぐ入寮者たち＝栃木県のシェルター

昼食を食べ終えてくつろいでいると、1人が菓子パンを持ってきてかじり始めた。

「薬も男も断って、残ってる欲が食欲と睡眠欲しかないから。みんな食べる量が増えちゃうんですよ」

そう教えてくれたのは、23歳のマキ(仮名)。覚せい剤を初めて打ったのは17歳のときだという。

### ■1年薄のく幻聴

「やりたいならあげるけど、どうする？」。ナンパで知り合った男2人に誘われた。驚きながらも、思わず「やりたい」と答えた。最初は気持ち悪くなり、家に戻って吐いた。しかし、再び注射してセックスをすると、首筋を触られただけで全身に鳥肌がたつ。「あり得ない快感」に襲われた。16歳で覚えたシンナーとはけたが違った。

1日が24時間では足りず、3日間寝ずに遊んだ。だが、薬が切れると体が重くなり、動くようになるのに3日かかった。次第に被害妄想や勘ぐりがひどくなる。自分の携帯電話のレンズを見て、監視カメラでのぞかれていると錯覚。携帯を壊したこともある。薬代を稼ぐため、風俗だけには足りず、出会い系サイトを知り合った男性に体を売っ

「現場を究める」は随時掲載します。皆さんの周りに、問題の埋もれた「現場」がありましたら、朝日新聞水戸総局へファクス(029・226・5055)またはメール(mito@asahi.com)でお知らせ下さい。

た。月80万円の稼ぎは、覚せい剤に消えた。

父親は歯科医。「薬をやめるなら」と、母親から10万円と通帳を渡された。やめられなかった自分を、警察に通報したのも親だった。

ダルクに来たが、脱走してまた薬漬けに戻った。今、2度目のダルクで1年だった。「お前はダメなんだよ」という幻聴が、やっと消え始めたという。

### ■自立は1割未滿

「最近、薬を使いたい欲求が本当にひどい」。28歳のユキ(仮名)が、ミーティングで訴えた。1年以上断っているが、欲求と孤独感で数日間眠れない。自分をつなぎとめているのは、親に預けた小学校低学年の我が子に会いたいという思いだけだ。

「薬物依存は一生治る」と



2009年(平成21年)  
4月1日  
水曜日

天気	6	9	12	15	18	21(時)	
水戸	☁	☁	☁	☁	☁	☁	80 12 5
宇都宮	☁	☁	☁	☁	☁	☁	60 13 5
前橋	☁	☁	☁	☁	☁	☁	70 13 6
さいは	☁	☁	☁	☁	☁	☁	60 12 6
千葉	☁	☁	☁	☁	☁	☁	70 13 7
東京	☁	☁	☁	☁	☁	☁	50 13 7
横浜	☁	☁	☁	☁	☁	☁	60 13 7
甲府	☁	☁	☁	☁	☁	☁	20 17 7
静岡	☁	☁	☁	☁	☁	☁	30 18 8

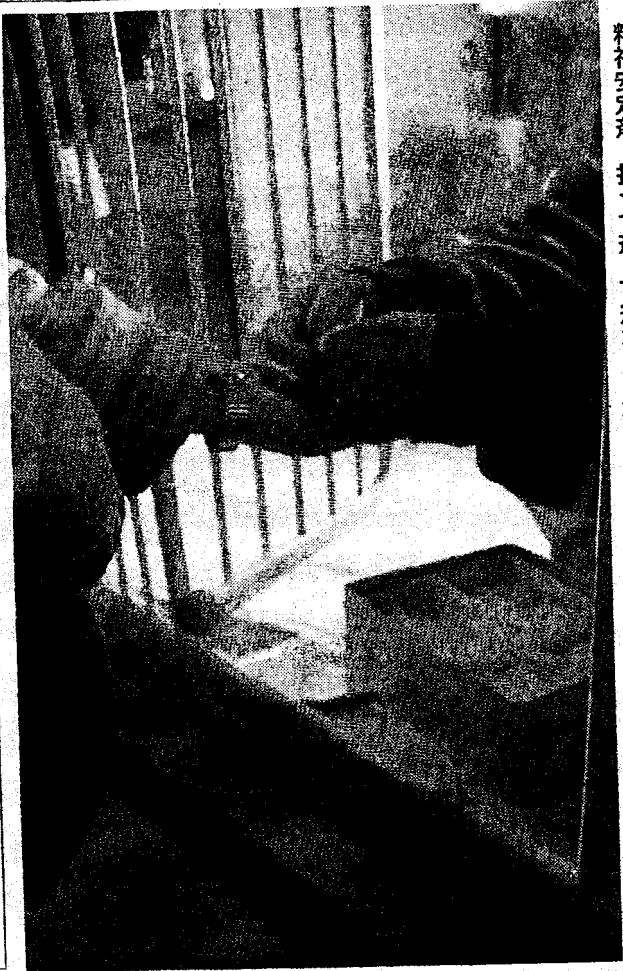
のない病气」。茨城ダルク代表で元暴力団組長の岩井喜代仁さん(61)は断言した。「今日1日だけ薬を使わない。その積み重ねで年を重ねていくしかない」。自身も覚せい剤を17年我慢してきたという岩井さん。語りながら、肩間にしわを寄せた。

3月27日夜。車で20分ほど離れた教会の一室に、みんなで作った空揚げとチーズケーキが並んだ。32歳のミナコ(仮名)がケーキの上のろうそく3本を吹き消すと、大きな拍手に包まれた。

ダルクでは薬を断って1年たつ度に、「パーステイ」として祝う。ミナコの3年は、入寮者の中では最長だ。

2月には入寮したばかりの女性が、庭で首をつって自殺した。逃げ出す人も後を絶たない。薬と縁を切って自立できるのは、1割にも満たない。(中村真理)

「薬だよ」の声を合図に入寮者（左）がスタッフ部屋の前に列をなす。精神安定剤、抗うつ剤、下剤など、決まった量をもらう。栃木県



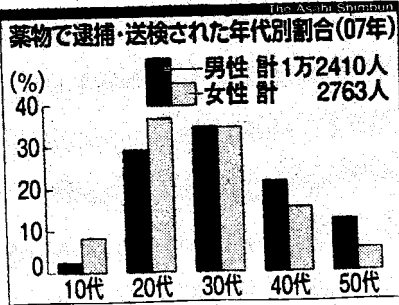
## 受け入れ施設少なく

警察庁と厚生労働省などのまとめによると、覚せい剤や大麻など薬物の売買や所持などで07年に逮捕、書類送検された女性は全国で2763人と、男性（1万2410人）の5分の1に過ぎない。しかし、関東信越厚生局麻薬取締部の見方では、女性は個人的な乱用者が多く、密売組織に携わる数は少ないため、検挙数に反映し切れていない可能性がある。

年代ごとの検挙割合は10代、20代の若い世代の比率が男性より高いグラフ。女性の依存者は使用期間が長期化しやすいと言われる。薬物依存の人たちを支援する茨城ダルクの岩井喜代仁代表は「女性は体を売って薬を使い続けてしまう。男性に比べて依存が進み、幻覚や幻聴などの後遺症や精神障害など悪化した

状態になった後で、助けを求めて来る人が多い」と指摘する。また、女性の場合、自宅で薬物を使用する例が少ないため家族が気づかず、結果的に放置されるケースが多いという。

現在、女性の依存者を受け入れる施設は少ない。ダルクは現在全国に男性用の施設を40カ所持つが、女性用は4カ



所。そのうち、定員が10人以上なのは茨城ダルクが運営する栃木の施設(定員15人)だけだ。現在、定員を超えて受け入れられているが、それでも10人近くが待っている状態だ。東京都、高知県、宮崎県にある他の女性用施設でも1年待ちは当たり前だという。茨城ダルクは4月、県西に定員15人以上の女性用施設を新設する。

# 女性に多い個人的乱用